

1 日 時 令和6年2月29日(月) 午後2時30分から4時30分まで

2 参加者

(1) 委員

- 特定非営利活動法人 くらしえん・しごとえん 代表理事 鈴木 修
- 五島地区自治会連合会 会長 鈴木美佐男
- PTA会長 鈴木 奈美
- 浜松市危機管理課 課長 小林 正人
- 国立特別支援教育総合研究所 主任研究員 柘植 美文
- (株)日本マクドナルドフランチャイジー 株式会社フロム東海 代表取締役 山田 晴茂
- 西・南障がい者相談支援センター センター長 後藤翔一朗

(2) 本校職員

校長、副校長、教頭、事務長、小学部主事、中学部主事、高等部主事、教務課長、進路支援課長、防災課長、情報教育課長、CS担当

3 次 第

(1) 開会 校長挨拶

令和4年度に学校運営協議会を立ち上げた。2年前の最初の会では、学校評議員会と学校運営協議会との違いについて話した。「学校評議員会は御意見を頂戴する仕組みであり、学校運営協議会は御力を貸してくださいという仕組みである。」というような内容だったと振り返る。この2年間、学校運営協議会の委員の皆様から御意見や御知恵をいただいたり、実際に活動いただいたりし、それらが力となって、学校が強くなったと感じている。大変感謝している。本日もよろしくお願ひしたい。

(2) 令和5年度学校経営報告(学校自己評価報告)、令和6年度学校経営計画(案)について

ア 令和5年度学校自己評価の報告

イ 令和5年度教育活動にかかわる保護者アンケート結果についての報告

ウ 令和5年度不祥事根絶に向けた取組報告及び成果と課題

- ・校長からの週1回のメール配信、学年会でのテーマを設けたグループワーク年4回実施等に取り組んだ。
- ・不祥事は0件。加害事故は前方不注意による追突事故が1件発生した。加害事故は昨年度よりも減少した。具体的な事例を基に掲示板等を活用してさらに注意喚起していく。
- ・職員に交通安全の標語を募集し、玄関前に掲示した。学年会による不祥事根絶に向けたグループワークと共に次年度も継続して取り組む。

エ 令和6年度学校経営計画(案)について

- ・令和6年度教育目標、目標具現化の柱、職員に求める五つの行動、令和6年度学校経営計画(案)について説明した。

オ 質疑応答

- ・保護者アンケート結果の分析方法について、A評価は何人、B評価は何人と結果が出ているが、複数の方がC評価としているのか、一人の回答の中で、C・D評価が多いのか。全体の数字だけでは見えないこともあるのではないかと感じた。(鈴木 修氏)
- ・保護者アンケート結果の人権に関することについて、給食のことや移動のことは実際どうだったのかよく教育の場面では、その場面だけが切り取られてしまうことがある。流れの中でとらえることが大切だと思う。保護者から言われて全て分かりましたということではないと思う。アンケートによって先生たちが萎縮してはいけないと思う。(鈴木 修氏)

→このようなときには、必ず聞き取りをして確認している。このケースでは、本人の言い分があったが確かにあった。ただ、日頃から誤解される言動を取りやすいということもあり、それらを含めて指導した。指摘のとおり流れの中で把握するようにしている。いずれにしても、確認は必ずしている。

(校長)

- ・前方不注意の事故が発生した時間帯や勤務状況について分かる範囲で知りたい。(柘植 美文氏)
- 休日の夜間、雨上がりの滑りやすい路面で、信号待ちの先行車に気づいていたが止まりきれなかった。大きな行事が終わった後だった。昨年度までの加害事故は、朝の時間帯が多く、助手席の荷物に気を取られた等による事故であった。(副校長)
- ・このケースを全体の学びにつながるとよいと思う。(柘植 美文氏)
- 校内の掲示版でその都度、注意喚起をしている。今後も継続して働き掛けていく。(副校長)
- ・令和5年度学校評価のICT活用の促進について、成果目標に対する達成状況が触れられていない。文言を変える等、表記の見直しが必要ではないか。(小林 正人氏)
- ・令和5年度学校評価の不祥事0件について、0件ならばA評価でよいのではないかと。交通事故は、倫理に関する事なのかという点で違和感がある。交通安全という項目を設け、分けて評価することもできる。加害事故の詳細を聞く中でも、倫理観がないわけではないと思った。A評価でよいのではないかと。(小林 正人氏)
- (ICT活用の促進の評価、不祥事0件の評価について)再度、検討する。(教頭)
- ・私たちは教育活動について断片的にしか分からないので、評価の難しさを感じている。先程の不祥事0件についても、私も交通事故は不祥事ととらえなくてよいと思う。(鈴木 修氏)
- ・保護者アンケートの聞き方の難しさを感じた。生活単元学習や作業学習に生き生きと取り組んだかという問いがあるが、高等部の作業学習で生き生きと取り組んだという言葉が合っているのか悩ましい。高等部で「やや不十分」という評価には、このような設問との関係があるのではないかと。(鈴木 修氏)
- ・生き生きと楽しくというよりも、将来の自立に向けて自分たちができることを一生懸命にやろうとしていると読み替えればよいのではないかと。参観会の作業学習は、素晴らしくて生徒は夢中で取り組んでいる。先生方も「もう少しできる。」とか、「やり直してみよう。」等、厳しさはあるかもしれないが、社会に出て役立つことを程よく支援していると思っている。(鈴木 奈美氏)
- 保護者アンケートの質問項目について、3学部一律に生き生きと取り組む姿として聞いているが、生き生きと活動する姿を学部ごとに設定する等、評価のしやすい言葉を選んで、項目とした。(教務課長)
- 小学部は遊びが中心なので、保護者に見てもらいたい視点として生き生きと取り組む姿という問いは適切だ。このように、中学部、高等部における作業学習での視点を明確にすることが必要で、そのことで、より信憑性のある評価になるだろう。(校長)
- 聞き方は、学部に応じて適切な言葉を設定できるよう検討する。(副校長)
- ・隣接する三校について、以前からつながりができるとよいということを伝えてきた。災害時に高校生が特別支援学校や中学校へ助けに行くことができるように、道路が来年度完成する。地域の渋滞の解消も含んでいるが、より連携が進むのではないかと期待している。(鈴木 美佐男氏)
- ・先生方だけの連携だけでなく、生徒間の連携ができるとよい。最近は高校の制服のデザインについて、中学生にアンケートを行った。今後もますます連携して行ってほしい。地域も応援していきたい。(鈴木 美佐男氏)
- 今年、取り掛かり始めるところだが、次年度には三校の連携がさらに広がるよう、引き続き自治会のお力を頂戴したい。(副校長)
- ・学校経営計画書について、いつも素晴らしいと思っている。こういう学校にすることを常に言い続けていることが素晴らしい。私のマクドナルドでも「歓迎の気持ちを持ちましょう。」と伝えているが、それがきちんと伝わっているかというとなかなか難しいと感じることが多い。一例として、マスクをしていると歓迎の気持ちを伝えることは難しい、ということで、「マスク越しの笑顔」というキャッチフレーズを共有するようにした。マスクをした様々な表情のカードで違いに気づくことに取り組んだり、グットスマイルカードを作り従業員同士で評価し合ったりしている。ビジョンの進捗を具体的に見て、少しでもうまくできたことをいかに引き上げるかという方法で進めている。学校経営の内容について、職員が腹落ちして進めれば素晴らしい。これらの内容の進捗を具体的に見る方法があれば御披露いただきたい。(山田 晴茂氏)
- 週1回、メールを本校、分校へ配信している。記事の内容は極力、経営計画に沿った内容にしている。心

掛けていることは、同じ言葉を使うようにしている。言葉を大事にして伝えようと努めている。そういうことで言えば先程のマスク越しの笑顔という言葉は大変素晴らしいと感じた。(校長)

- ・私はいろいろな相談を受けているが、担当を代えてほしいとか、担当者にこのように言われたなど、多くの相談がある。保護者アンケートを見ていると、先生方の大変さが垣間見える。保護者アンケートについて、高等部になるにつれて、不十分という評価が増えるということだが、ここに記載している以外にも意見があったか。(後藤 翔一朗氏)
- ・掲載している意見以外はなかった。C、D評価には理由があるのだろうが、十分引き出せていないと感じる。やはり質問の文言をさらに検討したい。(教務課長)
- ・高等部にはちらほらC、D評価があり、個々に見ると、中にはC評価が並んでいるという全体的に厳しい評価のアンケートもある。(高等部主事)
- ・高等部の作業学習の生き生きわくわくする姿について、小学部の遊びを中心としたわくわく楽しい生活単元学習と中学部の作業学習の「身近な人に使ってもらおう、オー！」ということに比べると、高等部の作業学習は粛々と取り組むという雰囲気が変わってくるので、イメージがぴったりこない印象を持つ方もいるだろう。高等部の作業学習で大事なものは、働く意欲で、やりがいを感じ、それらの成功体験が卒業後の働く生活に結びついてほしいと思う。作業学習は程よく厳しいというお話があったが、それは訓練的にやっているということではなく、お客さんに喜んで買ってもらえるような製品を作りたい、そのためには製品の精度を高めたい、だから、もう少し丁寧にやろうという製品に対する厳しさだと思う。(高等部主事)
- ・販売会当日だけでなく、過程も大切にしている。今年は、ポスターを五島協働センター等に500枚配布し、256人の来場があった。ポスターを手渡すことで会話が広がったとか、受け取ってもらえた等、販売会に向けた過程での静かなるわくわく感や、できなかったことができるようになった静かなる喜びを感じられる作業学習でありたいと思っている。それを生き生きわくわくという言葉に読み替えて評価している保護者もいたかと思う。(高等部主事)
- ・我々の仕事は日曜日の昼のピークの時間帯は特に忙しく、働きたくないと思うのではないかと心配になるが、従業員はピークが過ぎると「やったあ。」と声上がる。目標を達成すればさらに喜んでいる。そこで思うのは達成感ということである。そのとき楽しくてわくわくすることではなく、達成感ということが大事なのではないか。生き生きわくわくという言葉に変わる言葉として良いのではないかと思った。(山田 晴茂氏)
- ・授業づくりでは小学部から中学部、中学部から高等部とA評価が少しずつ減っている。昨年度も同様なことが話題になったと思うが、減っているのは、小学部から中学部へ等、内部から進学している保護者の数字が反映されているのか。(柘植 美文氏)

→そこまでの分析には至っていない。(教務課長)

→傾向がつかめれば、小学部から中学部へ上がってきた保護者は、小学部の生き生きわくわくを思い描いていて、小学部との違いを感じるが、中2・中3になれば、少しずつ理解していくということであれば、打つ手があると思う。(柘植 美文氏)

→分析をすることはとても大事だと思う。AとB評価で有効の値とするか、A評価だけにするか、教務課長とかなり話した。Aの多さやCの割合の多さなど、詳しく見ることが大事だと思っている。改めてご助言いただいたことは取り組んでいきたい。(校長)

(3) 講演 「浜松特別支援学校 学校運営協議会に期待すること」

講師：独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 柘植 美文先生

(以下、講演概要)

ア 2年間の取り組みの振り返り

2年前に学校運営協議会が立ち上がり、発足当時は、学校運営協議会の役割とは何かということや、見通しが持てないなど、不安だったが、委員の皆さんから「～だったら協力できる。」「役割や目標を共有していこう。」という意見が出され、第1回の協議会の終わりには、山田さんからの「覚悟はできている。」という言葉で全員の気持ちが一つになった。

授業参観や協議をもとにした教育活動の整理により、学校のしてほしいことが具体化していった。

イ 全国のコミュニティ・スクールの導入状況

コミュニティ・スクールの導入、地域学校協働本部の整備状況、地域学校協働活動推進員等の配置状況について説明する。特別支援学校のコミュニティ・スクール導入率は45.7%で、校種全体から見ると少しゆっくり特別支援学校は進んでいる。地域学校協働本部の整備率については特別支援学校21.2%で全体は61%なので、特別支援学校はあまり進んでいない。この仕組みが特別支援学校には合わないのかもしれない。浜松特別支援学校では、学校応援隊づくりプロジェクトがこれに代わるものなのだと思う。このやり方は一つの提案として良いやり方ではないか。

コミュニティ・スクールの取り組み事例として、小中学校で地域と保護者を含めたチームで不登校対策に着手している例や、学校・家庭・地域の課題を共有することを通して家庭訪問を廃止した等、学校の業務の見直しをした例、農業高校が企業とコラボレーションしながらスマート農業を実現した等の例がある。共通していることは、学校と地域のニーズを明確にしているということと、継続できる形で取り組んでいるということである。無理のない形を探っていくことが大切である。

ウ コミュニティ・スクールの充実を目指して

浜松特別支援学校がコミュニティ・スクールを導入する意義は、学校と地域が一体となって子どもの成長を支える仕組みづくりが第一である。それには、浜松特別支援学校がこの地にあるということ地域の人に知ってもらうこと、そして、地域の人たちに授業を見てもらったり、子どもたちが地域へ出掛けていったりする等により地域と触れ合うことが、これらのことがとても大事なことだと思う。それは障害がある子どもということではなくて、地域で育てている子どもだという意識を地域の人たちにどれだけ持ってもらえるかである。

コミュニティ・スクールの活動がこの地に広がっていくことは、子どもたち、地域の人たち、そして教員のウェルビーイングの育ちにつながる。保護者、地域の人、学校の教員のそれぞれのウェルビーイングが向上し、循環を生み出すことをコミュニティ・スクールで期待する。

今後については、地域と共にある学校、学校と共にある地域という意識を学校側と地域側で醸成していく、そのような取り組みを行ってほしい。

(5) 講演対する感想

- ・障害福祉の分野でも今、地域包括ケアシステムや地域生活支援拠点、複雑な生活課題を抱えた重度の障害がある方が住み慣れた地域で暮らしていけるようにするための体制整備が進んでいる。地域連携のことを問われているのだと思う。ただ、箱があるだけでは成立しない。やはり、この地域に住みたい、あるいは、支えたいと思えないと機能していかないと思うと、その一つとして、このコミュニティ・スクールというのはとても重要な取り組みだと感じる。研修も踏まえながら、学校応援隊のような具体的な取組から地域への愛情を育ていけることが望ましいと思った。(後藤 翔一朗氏)
- ・頭が非常によく整理された。企業はどういうことができるかということだが、企業で気持ちのある人たちが集まって少しでも応援するような具体的な動きは、どのようにしたらよいかと考えている。事例があったら教えてほしい。(山田 晴茂氏)
- ・いつも子どもたちが助けてもらうということではなくて、この子どもたちができるとかこの学校が地域にできることは意外とあり、これは助けてもらっているかのように見えて、実は、その方々も自分の生きがいを見つけてくれている、まさにウェルビーイングだなと思った。(鈴木 奈美氏)
- ・学校からの要請があれば、地域で仕事をしているところを紹介したり、環境を作ったりすることはできる。もっと浜松特別支援学校は、地域の中に入ってよいと思う。地域は、発表や販売の場を用意することはできる。地域と学校、家庭は三位一体となって、子どもを育てていくことが大切だと考える。(鈴木 美佐男氏)
- ・地域の動きとして一例をあげると、中学校では土日のクラブ活動は、学校から地域で取り組むという流れがあり、地域はその準備を進めている。学校単位ではなく、複数の学校を受け入れることになるので愛校心はどうなるのかという心配はあるが、地域の特色ができる機会ともとらえている。(鈴木 美佐男氏)
- ・五島協働センターの中にもいろいろなクラブがあり、生徒が関わることも十分可能である。特別支援学校だけでなく、このような場を活用する学校が増えていくと、地域と学校がそれぞれ活性化していく。(鈴木 美佐男氏)
- ・柘植先生からコミュニティ・スクールの取り組みは、先生方にとって負担だったのではないかと心配になったという話があったが、学校ではどう感じているか。(鈴木 修氏)

→コロナ禍からコロナ前の地域と関わっていた頃に戻したいと思い、取り組んだ2年だった。先生方に地域

学習に取り組んでみようという地域への意識をもってもらうために、多くの提案をしてきた。地域とのつながりが手探りだった頃は、大変さもあつたかと思うが、彩ファームさんとの関わりが、地域学習を進める上で大きなきっかけとなった。この彩ファームさんとのつながりが、他の学年、学部へ広がり、活動内容も収穫体験から栽培指導を受ける等、多様になっていった。彩ファームさんとの関わりで地域学習の進め方が分かってきてからは、いろいろなところで地域学習が増えたと思う。負担だったかは、私は推進の立場だったため、先生方に聞いてみたい。(CS担当)

- ・後藤さんから福祉の話があつたが、教育だけでなく、日本だけでなく、世界中が多様性を受け入れながら、いろいろな人とつながりながら、いろんな人と対話をしながら作っていきましょうという方向に動いていると思う。(柘植 美文氏)
- ・地域をどうとらえるかということを改めて考えた。子どもたちが育つ場所としての地域と、卒業した後の地域がある。学校を卒業するという事は、支えられる側から支える側になっていく。育てられる側から地域を育てる側である。そう考えると、浜松市全体の大きな話になっていくのだろうと思う。例えば、企業のネットワークは西部地区にはない。できたとしても民間になるので、なかなか難しいだろう。それでも地域での企業のつながりは考えていかないと、人材不足等で地域が死んでしまう。だから、例えば強度行動障害に対しても真っ正面から据える等、地域を支えるという視点が重要だと思う。そのためには、国等の全体の動きを見ないといけない。今、障害者雇用代行ビジネスが静かに浸透してきている。そのような社会全体の動き等、卒業した後のことも先生方には知ってもらいたい。子どもたちがいずれ地域で育っていく側になることを思うと、教育からさらに広げて考えたいと改めて感じた。(鈴木 修氏)

(6) 閉会 校長挨拶

25年くらい前のこと、文部科学省の海外派遣制度でニュージーランドに3か月間研修に行った。ある日の放課後、保護者や地域の人の、福祉、医療の関係者が学校に集まる会合に同席した。非常に活気ある会だった。振り返るとあれはコミュニティ・スクールだった。地域の方々の力を借りて、学校を強くする学校づくりをしていたのだと思う。そこには、柘植さんのお話にあつたように、子どもたちがハッピーになり教員もハッピー、地域の人のもやりがいを感じてハッピーになる、そういったものがあつたと振り返る。本会での皆さんの話を聞きながら、本校もそれに近付いてきていると感じ、うれしく思う。

2年経ったので、本年度末で本会は一区切りにしたいと思う。継続される方にはお声を掛けさせていただく。ここで終わりになる方もいらっしゃるが、学校の応援隊として引き続きお願いしたい。

最後に、浜松特別支援学校の学校整備について報告する。浜松城北工業高等学校内にある城北分校は令和6年度から、1学年3学級、計9学級に増える。さらに、浜松江之島高等学校内に分校ができる。そして、本校の校舎をこの地に建て替える。このように子どもたちの学習環境も整ってきている。未来に向けてますます成長する本校、今後も応援隊としてよろしくお願いしたい。

4 連絡

- ・令和6年度第1回学校運営協議会は令和6年6月上旬の方向で調整する。候補日のアンケートをとる。